

外国人の子どもの日本語習得を
支援する愛知淑徳大准教授

こじま よしみ
小島 祥美さん(43)

「日本語が分からないために学校に行けない外国人の子どもをゼロにしたい」と語る口調は熱っぽい。愛知、岐阜両県や三重県松阪市で、外国人の子どもが安心して日本語を学べる教室や学校づくりを支援している。



この人

大阪大大学院生だった二〇〇三年、日系ブラジル人など外国人が急増していた岐阜県可児市に大阪市から移り住んだ。以降、二年間にわたり、市内の外国人の子ども

の状況を調査。全体の一割に当たる約三十人が学校に行っていない実態を明らかにした。

日本語ができないため不就学に陥った子が多かった。この結果が市を動かし、市立の小中学校に入学した子どもに日本語の初歩を教える教室が設置された。高校に進学する子どもも次第に増えた。

〇七年から愛知淑徳大の教壇に立ち、現在は准教授。異なる文化を持つ人たちが共に生きる意義を学生に語り掛ける。教員になり、小中学校で外国人の児童・生徒の支援に携わる教え子も増えてきた。「少数派の外国人の子どもたちが生きやすい社会をつくることは、日本人の子どもの個性を大切にできる社会にもつながる」。名古屋在住。

(紙山直泰)

2017年7月17日(月) 中日新聞より

この記事・写真は中日新聞社の承諾を得て転載しています。